

乳幼児の発達段階に伴う

保育方法についての一考察

西南学院短期大学児童教育科

高 橋 さ や か

1、着眼の動機

保育方法が乳幼児の発達段階に伴つて考慮されなければならないことは論を俟たない。こゝに試みた考察は乳幼児の発達段階に器質生成期と機能発達期が、ほゞ時期的に交互にあらわれることと、器質生成期には機械的反復訓練の形をとる保育方法が、機能発達期には、知能的構成的遊戯のごとき保育方法が、適切ではないかといふことについてである。この問題をとりあげた動機は、日頃接している幼稚園児の四一五才児のクラスが総体的に心身の状態が不安定であり、却つて三才児のクラスの方が著しく落着きの見えること、同様に保育部の子どもたちの中でも、八、九ヶ月ごろ、一才八、九ヶ月頃、及び二才六ヶ月前後に、きわめて強情な傾向を見せる者が多いことの事実と、新生児から満六才までの発達過程の一覧表を作成した時に、器質生成に関連する記事が多くあげられる年齢層と機能発達の様相が多くあげられる年齢層とがかなり明瞭に区別できた。

ことにあつた。

例えば、一年六ヶ月から二ヶ年までの間には「頭の大きさは体の三分の一になり、大脳の大きさが新生児の二倍になる」ことがあげられるが、同じころ「言葉の意味を理解はじめ」「影、不明瞭な像、不透明な像、透明像、插画像などを弁別する」と言われるようになるのは、明らかに脳神経組織の充実——器質生成に伴う現象であると考えられる。これに比べ、次の二ヶ年から二ヶ年六ヶ月に至るところ「自由自在に歩ける」「いろいろな玩具に興味をもつ」「語彙が著しく増加する、しかし乱れ音、靴音、発音困難がまだのこつている」という状態を示すことは、器質的には前の時期に加えているものはまだあまりなく、練習の結果機能的に非常に発達してきたことをものがたるものであると見られる。(但し、この別は勿論厳密に言わることではなく、二カ年から二カ年六ヶ月の間に背骨の発達が目立つ、というような事実もあり、機能発達期には器質の生成がないというわけのものではない)同じように四カ年までと五カ年ま

での段階をわけて見ることができ（表参照）大体に於て、器質生成期、機能発達期は交互にあらわれ、更に言うならば、これに加えて

機能完成期とでもよぶべき時期があつて、この機能完成期と次の器質生成期が若干重り合いつゝ存在するものように考えられた。仮に一連の時期的交番をのべると生後一週間乃至十日までは、胎児期の完成期でこの期を含め一ヵ月までが新生兒としての器質生成期であり、三ヵ月までが機能発達及び完成期である。次で三ヵ月から六ヵ月までが第二次的な器質生成期であり、一ヵ年まで機能発達期、一ヵ年六ヵ月までが機能完成期である。一ヵ年六ヵ月、ころから第三次的な器質生成期に入り、二ヵ年前後から器質生成をつゝけながら著しい機能的発達を示す。かんしゃくをおこしたり、すねたりくやしがつたり強い恐怖や興奮を示したり、というような事実があげられるが情結の分化発達が著しいのは、それだけ活発化した機能を表すものと考える。三ヵ年までが機能完成期であるが、脚の長さが急に発育すること乳歯が生え揃うこと等、器質的にも幼児前期の完了を示す条件が揃う。幼児後期の器質生成及び整備の時期が四ヵ年まで、五ヵ年までが機能発達期、六ヵ年までが機能完成期であり幼児後期としての完成期であると共に児童期に入る為の器質生成がはじまるとする時期になる、と言えるようだ。

これはわかりきつたあたりまえの事実だといえども、そうかもしれないが、一般的にとり扱いの上からそれほど区別されていなかつたのではないが、そのことが案外に乳幼児の発達途上に於る円滑性、安定性を欠かしたものである。

2、失敗と成功の事例

私はとり扱いの如何によつてあらわれるべき結果を、統計的に表明し得ないし、今後も私の立場としては、とり扱いを実験的に相当数の児童に対しても試み、結論を得る事はのぞみ難く思う。何故ならば、實際保育の集団的とり扱いの中で、機械的訓練と構成的乃至知能的遊戯とを、全々別個のものとして課することは考え難く、そうすることは結局子どもたちに偏りのある生活をさせる結果になることを恐れないわけにはゆかない。又、今日の保育施設の生活では月齢別に児童をグループに分つことも困難であり、厳密に言うと発達基準的月齢と、曆月齢は必ずしも一致しないのだから、このグループ別は一層困難なことになる。それにもかゝわらず、なおこの問題をとりあげるのは、カリキュラム編成の際に、たゞ単に、行事或いは季節、或いは社会機構、人事等について、とりあげるべき單元を定め、年齢の幼いものには簡単平易に、長ずるに従つて稍複雑化した形に於て、教材をとりあげるようなやり方に加え、多少とも発達の時期的特質により多く添つべき考慮をする余地があると思うこと及びケース・ワークの立場から特に成功を期し得る場合が多いと考へられることに依る。

次にあげるのは僅かなテストケースであるにすぎないが、今後もこのような形でならば更に詳しく問題を追求することも出来るし、とり扱いの実施とその成功を期し得るものと思う。

Kは四才六ヵ月の女兒であるが、I・Q一二〇を示し、言語動作も明瞭で可愛らしい。一才半上の兄が小兒麻痺のため母は特に優秀

性を誇示しがちな傾向がある。ところがたゞ一つの欠点は、このKに夜驚症と、さして頻繁ではないが夜尿症があるということである。尤も夜尿症の方は、母親はまだ時々くらいはという意見であったが、この子は二才半ころから非常におとなしくひとり遊びをして、母のいうことによく従い決して我まゝを言うことがなかつたのに、夜驚症が出はじめたころ（三才前後）から、時折思いがけないほど強情を言うことがあるようになつた。しかし、相変らず普通の時は、兄のことまで気をつかうよい子であるという状態であるが、保育者としてみれば、Kの強情は母の言うよりも頻度が高く、かつ根が深いものであります／＼進行しそうに思われた。この夜驚症や強情の原因は、三才から四才、そして現在に至るまでの間に、あまりに賢い子として発達段階のそれ／＼の時期的特徴を無視してとり扱われたのによると思う。又Bは、五才五ヶ月になる男児だが、ひどく落着きがなくなつて來た。Bの母は所謂教育熱心な、とかくとり扱いも理づめでしがちな人だが、あまり自分が本などでよんだ標準教育に合致させようととして干渉が多すぎたようである。KにしてもBにしても、母の自慢や虚栄のため、歌を唄うことや字をかくこと、絵をかいたり積木をくみたてたり計算をすること、挨拶をすることなどを人前で度々くり返させられること、成人のたまない注視のものにおかれていることなどで、どちらかといえ、じっくりとしかも自由な自發的な心から追求されねばならないような問題について、却つて機械的反復が強いられ逆に、反復練習を要するような時に、それ以上の段階に早く到達することを強制するようなどりあつかいをうけた事実は、母親との問答の間に十分証明されていたもの

であつた。これと反対の事例としてあげてよいと思われることは、私の関係している保育所の満四一五才のグループであるが、環境の条件に恵まれないため暦年齢が四一五才であつても、発達の程度は三才前後のものが八割を占めている。約十二名の子供達に対し専ら、反復話、体操を中心とするカリキュラムを実施したところ、環境に順応して、心身状況の調整を得ることが比較的短時間に得られたことである。これは意識的にそういうカリキュラムに依つたとり扱いをしてから日が浅いので確定的には言えないが、漠然と、いろいろ／＼ものをさせていた時に比べると、四日乃至一週間ばかりも早く、保育者になじんだといえるようだと思つ。（従来ふつう二週間近くたつまで新入児は、その言動のどこかに、恐らくは彼自身の最も平常的な状態とは異なるものであろうところの様子を示したものであつたが、本年は、一週間から十日たつうちに、殆ど順応したものの如くである。但し非常に長くかかる者についてはまだいえない）。前記Kについては、粘土遊びや自由画をさせるほか、簡単な作業——玉つなぎとかぬいとりとか、砂ぶるいなどをあきるまでさせることにより、Bについては、一切干渉をやめて、子供自身の気のむくままに好む遊びを氣のすむまでさせること（共に、前段階に於て十分になされなかつたことを補充する意味で）によつて、好結果が得られるのではないかと考えてゐる。

3、結語

以上、事例も乏しくかつ又、真に意図に即した条件を具えたものとして確度が高いか否か、些か不十分にすぎるのを遺憾とするが、

絶対的なものとしてでなく、あくまでとるべき多くの保育方法、手段の中の一つとなれば、或る程度の価値をもつ試みと言えるものではないかと思う。はじめ私は、器質生成期の方がより不安定な時期であると考えていたが、実際には器質生成期はその前の機能完成期をうけて却つて子供に落着きのみえる時期であり、機能発達期こそ保育者が慎重を期さねばならない時期であること、機能発達期である六ヶ月——一ヶ年、二ヶ年前後、二ヶ年六ヶ月——一ヶ年八、九ヶ月、四ヶ年——五ヶ年の間は子供の心身の状態が非常に不安定であることを知り得るようになる。それは一面、器質生成期は或る程

度はつきり目に見えるので、自然に保育者の注意が行届くし、保育方法は集団保育では多少とも機械的な反復的になり易いから、丁度とり扱いと発達状態がマッチするが、機能発達期の場合はその逆になり易い事情も考えられる。乳幼児期に於ては、発達過程のあり方に必ずしも一律に論ぜられないことは、十分に理解しなければならないことである。強いてこのことにこだわる必要もないと思うけれども、私としては、今後もなお追求しつづけるに足る問題だと考えられるのである。

幼稚園の道德教育

東京学芸大学

稻毛卓

(原稿不提出)